

金園選書

野菊の墓・隣の嫁

春の潮・浜菊・他3編

伊藤左千夫 著

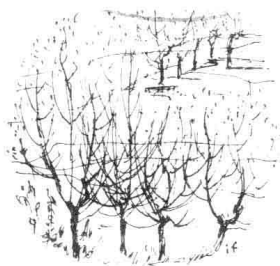
金園社

選書

野菊の墓・隣の嫁

他5編

伊藤左千夫 著



金園社

目次

野菊の墓	三
隣の嫁	四
春の潮	七
浜菊	一五
紅黄録	一九
告げびと	一四
奈々子	一五
注釈	一六
解説	一七
年譜	一八

さし絵 中込 漢

付記・

本作品集においては、原文は新かなづかいに改め、原文をそこなわぬ範囲において現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また原文中の難解な漢字や表現には巻末に注釈を試みた。いずれも読者の作品鑑賞をたすけるための処置だが、ここにあわせて付記しておきたい、（編集部）

野
菊
の
墓

後の月つきという時分が来ると、どうも思わずにはいられない。幼い訣くはとは思ふが何分にも忘れることができない。

もはや十年余も過ぎ去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えていないけれど、心持ちだけは今なお昨日のごとく、その時の事を考えてると、全く当時の心持ちに立ち返って、涙がとめどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思ふ事もないではないが、むしろくり返し考えては、夢幻的の興味をむさぼっている事が多い。そんな訣からちよつと物に書いて置こうかという氣になったのである。

僕の家というのは、松戸マツトから二里ばかり下って、矢切ヤギリの渡わたを東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と言つてゐる所。矢切の斎藤と言へば、この界限かいげんでの旧家で、里見の崩やぶれが二三人ここへ落ちて百姓になった内の一人が斎藤と言つたのだと祖父から聞いている。屋敷の西側に一丈五六尺も回るような椎の樹が四五本重なり合つて立っている。村一番の忌森いみもりで村じゅうから羨うらやまましがられている。昔から何程暴風ぼうふうが吹いても、この椎森のために、僕の家ばかりは屋根を剝むがれたことは只の一度もないとの話だ。家などもいふんと古い、柱が残らず椎の木だ。それがまた煤すすやら垢かやらで何の木か見別けがつかぬくら

い、奥の間の最も煙に遠いところで、天井板がまるで油炭で塗つたように、板の木目も判らぬほど黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠くぎかくしなども打つてある。その釘隠がばかに大きい雁がであった。もちろんちよつと見たものでは木か金かもしれないほど古びている。僕の母なども先祖の言い伝えだからといって、この戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢されていた。その頃母は血の道みちで久しく煩わづつておられ、黒塗りの奥の一間がいつも母の病褥びやうぶくとなつていた。そのつぎの十畳の間の南隅みなぐみに、二畳の小座敷がある。僕がいない時は織場おりばで、僕がいる内は僕の読書室にしていた。手摺窓てすりまどの障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮さかつて北を掩おほうている。

母が永らくぶらぶらしていたから、市川の親類で僕には縁の従妹じゆめいになつてゐる、民子という女の兄が仕事の手伝やら母の看護やらに來ておつた。僕が今忘れることができないというのは、その民子と僕との關係である。その關係と言つても、僕は民子と下劣な關係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何カ月という頃、民子は十七だけれどそれも生ま

れが晩いから、十五と少しにしかない。瘦せぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅をおんだ、誠に光沢のよい児であつた。いつでも活々として元気がよく、その癖氣は弱くて憎氣の少しもない児であつた。

もちろん僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと言つては僕の所をのぞく、障子をはたくと言つては僕の座敷へ這入ってくる、私も本が読みたいの手習がしたいのという、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと言つて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる。

「また民やは政の所へ這入ってるナ。コラアさっさと掃除をやつてしまえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上のくせに……」

などと頻りに小言を言うけれど、その実母も民子をば非常に可愛がつているのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……など時々民子はだをいう。そういう時の母の小言もきまつている。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女一人前として嫁にゆかれません」

この頃僕に一点の邪念がなかったはもちろんであれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しもなかったに相違ない。しかし母がよく小言を言うにもかかわらず、民子はお朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せるの筆を借せのと言つてはしばらく遊んでいる。その間にも母の薬を持ってきた歸りや、母の用を達した歸りには、きつと僕の所へ這入ってくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかなと思ひ出すと、ふらふらと書室を出る。民子を見にゆくというほどの心ではないが、ちょっと民子の姿が目に触れば氣が落ち着くのであつた。何のこつたやっぱり民子を見に來たんじゃないかと、自分で自分を嘲つた様なことがしばしばあつたのである。村のある家さ替女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断わりを言うて決して家を出ない。隣の祭で花火や飾り物があるからとの事で、例の向こうのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内ものものらまで民さんいっしょに行つて見てきたらと言うても、民子は母の病氣を言い前にして行かない。僕も

あまりそんな所へ出るは嫌であつたから家にいる。民子はこそこそと僕の所へ這入つてきて、小声で、私は内にいるのが一番おもしろいわと言つてニッコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかった。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でというからだと言ひ訣をする。家の者は皆ひそひそ笑つてゐるとの話であつた。

そういう次第だから、作おんなのお増などは、無上と民子を小面憎がつて、何かというところ、

「民子さんは政夫さんとこへばかり行きたがる、隙さえあれば政夫さんにこびりついている」

などと頻りに言ひはやしたらしく、隣のお仙や向こうのお浜等まで彼是噂をする。これを聞いてか、母に注意したらしく、ある日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味あり気な小言を言うた。

「男も女も十五六になればもはや児供ではない。お前等二人があまり仲が好すぎるとて人がかれこれ言うそうじ

や。氣をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくない。これからはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。わが子を許すではないが政はまだ児供だ。民や十七ではないか。つまりらぬ嘘をされるとお前の体に疵がつく。政夫だつて氣をつける……。来月から千葉の中学へ行くんじゃないか」

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思われたと氣がついたか、非常に愧じ入つた様子に、顔真赤にして俯向いてゐる。常は母に少しぐらい小言云われてもずいぶんだだをいうのだけれど、この日は只両手をついて俯向いたきり一言もいわない。何の疚しい所のない僕はすこぶる不平で、

「お母さん、そりやあまり御無理です。人が何と言つたつて、私等は何の訣もないのに、何か大変悪いことでもしたようなお小言じゃありませんか。お母さんだつていつもそう言つてたじゃありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの目からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつても言つたじゃありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんなにやらしいことを言われようとは少しも思つていなかったか

ら、僕の不平もいくらかの理はある。母はにわかにやさしくなつて、

「お前達に何の訣もないことはお母さんも知ってるがネ、人の口がうるさいから、ただこれから少し気をつけてというのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛えてゐる。やがて、

「民やあゝのまた薬を持ってきた、それから縫掛けの拾^{あひら}を今日中に仕上げてしまいなさい……。政は立った次^{ついで}手に花を剪^きつて仏壇^{ぶつだん}へ捧^{たも}げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑^{いしかん}でも切^きつてくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人がかれこれ言うのでかえつて無邪気でいられないようにしてしまう。僕は母の小言も一日しか覚えていない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は来ないのかしらんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからというものは様子がからつと變つてしまつた。

民子はその後僕の所へはいっさい顔出ししないばかりでなく、座敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に物も言わない。何となくきまりわるそうに、まぶしいような風で急いで通り過ぎてしまふ。よんどころなく

物を言うにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕があまりにわかに改まつたのを可笑しがって笑えば、民子もついには袖で笑いを隠して逃げてしまふという風で、とにかく一重の垣が二人の間に結ばれたような気合になつた。

それでもある日の四時過ぎに、母の言いつけで僕が背戸^{せきど}の茄子畑に茄子をもいでいると、いつのまにか民子が箒^{ほうき}を手に持つて、僕の後にきていた。

「政夫さん……」

出しぬけに呼んで笑っている。

「私もお母さんから言いつかつて来たのよ。今日の縫い物は肩が凝^こつたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ。明日焚^も火^{くわ}をつけるからつて、お母さんがそう言うから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しうに元氣一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきてゐるのを民さんは知らないで来たの」

と言うと民子は、

「知らなくてサ」

にこにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑というのは、椎森の下から一重の藪を通り抜けて、家より西北に当たる裏の前裁畑^{まへざいばたけ}、崖の上になつてゐるので、利根川はもちろん中川までもかすかに見え、武蔵一えんが見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も見える。東京の上野の森だというのもそれらしく見える。水のように澄みきった秋の空、日は一間半ばかりの辺に傾いて、僕等二人が立っている茄子畑を正面に照り返している。あたり一体にシンとしてまたいかにもハッキリとした景色、われら二人は真に画中の人である。「マア何という好い景色でしょう」

民子もしばらく手をやめて立った。

僕はここで白状するが、この時の僕はたしかに十日以前の僕ではなかった。二人は決してこの時無邪気な友達ではなかった。いつの間にかそういう心持ちが起こつてゐたか、自分には少しもわからなかったが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵がいくつか湧きそめておつたに違いない。僕の精神状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことのできない事実である。この日初めて民子を女として思ったのが、僕には邪念の萌芽ありし何よりの証拠じゃ。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつあるそ

の横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでにも可愛らしいと思わぬことはなかったが、今日はしみじみとその美しさが身にしみた。しなやかに光沢のある髪^{かみ}の毛につつまれた耳たば、豊かな頬の白くあざやかな、顎^{あご}のくくしめの愛らしさ、顎のあたりいかにも清げなる、藤色の半襟^{はんきん}や花染^{はなぞめ}の褌^{ふんどし}や、それらがことごとく優美に目にとまった。そうなると思ふらしいもので、物を言うにも思い切つた言は言えなくなる、羞^{はにか}かしくなる、きまりが悪くなる、みな例の卵の作用から起こることであらう。

ここの十日ほど仲垣の隔てができて、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならばむろんそんな事考えもせぬにきまつているが、今日はここで何か話さねばならぬような気がした。僕は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞^{ことば}が継がない。おかしく喉^{のど}がつまつて声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起こして、

「政夫さん、何に……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすっかり嫌いになつたようなもの」

民子はさすがに女性^{にょせい}で、そういう事には僕などよりは

るかに神経が鋭敏になっている。さも口惜しそうな顔して、つと僕の側へ寄ってきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいつ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、この頃民さんは、すっかり変わっちまって、僕なんかには用はないらしいからよ。それだって民さんに不足を言う訣ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりゃ政夫さんひどいわ、御無理だわ、この間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじゃありませんか。あなたは男ですから平気でおいでだけど、私は年は多いし女ですもの、あゝ言われては実に面目がないじゃありませんか。それでですから、私は一生懸命になってたしなんでいるんです。それを政夫さん隔てるの嫌になつたろうのと言うんだもの、私はほんといつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいっと睨ている。僕もただ話の小口に（こ）そう言うたまでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに気の毒になつて、

「僕は腹を立てて言ったではないのに、民さんは腹を立

つたの……僕はただ民さんがにわかに変わって、逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれから僕も時々はお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎（とが）を背負うから……人が何と言つたつてよいじゃないか」

何というても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを言われて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごったになって争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めてしまった。なお三言四言話をするうちに、民子はあざやかな髪りのない元の元氣になつた。僕ももちろん愉快が溢れる……、宇宙間にただ二人きりいるような心持ちにお互いになつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑だけれど、十月の半ば過ぎでは、茄子もちらほらしかなくていいない。二人でようやく二升ばかりずつを採り得た。

「まゝ民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか箆（へら）を下へ置き、両手を鼻の先に合わせて太陽を拝んでいる。西の方の空は一体に薄紫にほかしたような色になった。ひた赤く赤いばかりで光線の出ない太陽が今その半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一

心入日を拝むしおらしい姿が永く目に残っている。

二人が余念なく話をしながら帰ってくると、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こっちを見ている。民子は小声で、

「お増がまた何とか言いますよ」

「二人共お母さんに言いつかって来たのだから、お増なんか何と言ったって、かまやしないさ」

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層を増してくる。機に触れて交換する雙方の意志は、ただちに互いの胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮はたしかにその機であった。

ぞっと身振いをするほど、著しき徴候を現わしたのである。しかし何というても二人の関係は卯時代できわめてとりとめがない。人に見られて見苦しいようなこともせず、顧みて自らやましいようなこともせぬ。したがってまだまだ暢気なもので、人前を繕うというような心持ちにはきわめて小なかった。僕と民子との関係も、この位でおしまいになったならば、十年忘れられないというほどにはならなかっただろうに。

親というものはどこの親も同じで、わが子をいつまでも児供のように思うている。僕の母などもその一人に漏

れない。民子はその後時折り僕の書室へやってくるけれど、よほど人目を計らって気ほねを折ってくるような風で、いつきても少しも落ち着かない。先に僕に厭味を言われたからしかたなしにくるかとも思われたが、それは間違っていた。僕等二人の精神状態は二三日といわれぬほど著しき変化を遂げている。僕の変化は最もはなはだしい。三日前には、お母さんが叱れば私が咎を背負うから遊びにきてとまで無茶を言うた僕が、今日はとてもそんな訣のものではない。民子が少し長居すると、もう気が咎めて心配でならなくなった。

「民さん、またお出よ、あまり長くいると人がつまらぬことを言うから」

民子も心持ちは同じだけれど、僕にもう行けと言われると妙にすねだす。

「あれあなたは先日何と言いました。人が何と言ったってよいから遊びに来いと言いはしませんか。私はもう人に笑われてもかまいませんの」

困った事になった。二人の関係が密接するほど、人目を恐れてくる。人目を恐れるようになっては、もはや罪惡を犯しつつあるかのごとく、心もおどおどするのであった。母は口でこそ、男も女も十五六になれば児供ではな



いと言つても、それは理窟の上のことで、心持ちではまだまだ二人をまるで児供のように思っているから、その後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしているのを、すぐ前を通りながら一向気にとめる様子もない。この間の小言も実は娘が言うから出たまでで、ほんとうに腹から出た小言ではない。母の方はそうであつたけれど、兄や娘やお増などは、盛んに蔭言をいうて笑つていたらしく、村じゅうの評判には、二つも年の多いのを嫁にする気かしらんなどともつばらいうているとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕から言ひだして当分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持ちというものは不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であつただけで、僕の方から言ひ出したばかりに、民子は妙に鬱ぎ込んで、まるで元気がなくなり、悄然としていたのである。それを見ると僕もまたたまらなく気の毒になる。感情の一進一退はこんな風にもつれつつ危くなるのである。とにかく二人は表面だけは立派に遠ざかつて四五日を経過した。

陰曆の九月十三日、今夜が豆の月だという日の朝、露霜が降りたと思うほどつめたい。その代わり天気はきら

きらしている。十五日がこの村の祭りで明日は宵祭りという訣故、野の仕事も今日一渡りきまりをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出ることにした。それで甘露の恩命が僕等兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻の刈り残りをぜひ刈つて終わねばならぬ。民子は僕を手伝いとして山畑の棉を採つてくることになった。これはもとより母のさしずでだれにも異議は言えない。

「マアあの二人を山の畑へ遣るつて、親というものはよッぽどお目出たいものだ」

奥底のないお増と意地曲りの娘とは口を揃えてそういつたに違ひない。僕等二人はもとより心の底では嬉しいに相違ないけれど、この場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られるような気がして大いにきまりが悪い。義理にも進んで行きたがるような素振りにはできない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚図々々として支度もせぬ様子。もう嬉しがつてと言われるのが口惜しいのである。母は起きてきて、

「政夫も支度しろ。民やもさっさと支度して早く行け。

二人でゆけば一日には楽な仕事だけれど、道が遠いのだから、早く行かないと帰りが夜になる。なるたけ日の暮

れない内に帰ってくるようによ。お増は二人の弁当を拵えてやってくれ、お菜はこれこれの物で……」

まことに親のころだ。民子に弁当を拵えさせては、自分のであるから、お菜などはロクな物を持って行かないと気がついて、ちゃんとお増に命じて拵えさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足麦藁帽という出で立ち民子は手指を佩いて股引も佩いてゆけと母が言くと、手指ばかり佩いて股引佩くのにごうごうしている。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよいようにお母さんにそう言ってくれと言う。僕は民さんがそう言いなさいと言う。押問答をしている内に、母はききつけて笑いながら、「民やは町場者だから、股引佩くのはきまりが悪いかい。私はまたお前が柔かい手足へ、茂や薄で傷をつけるが可哀相だから、そう言ったんだが、いやだと言うならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の褥に前掛け姿で麻裏草履という支度。二人が一斗笠一個ずつを持ち、僕が別に番ニッ片籠と天秤とを肩にして出かける。民子が跡から菅笠を被って出ると、母が笑声で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被って歩くと、丁度木の子が歩くようで見つともない。編み笠がよからう。新しいのが一

つあったはずだ」

稻刈り連は出てしまつて別に笑うものもなかったけれど、民子はあわてて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかった。今度は編み笠を被らずに手に持つて、それじゃお母さん行つてまいりますと挨拶して走つて出た。

村のものらもかれこれいうと聞いているので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通り抜けようとの考えから、僕は一足先になつて出かける。村はずれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待った。ここから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稻に露をおんで、シットリと打ち伏した光景は、気のせいかに殊に清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾っている。

「民さん、もうきたかい。この天氣のよいことどうです。ほんとに心持ちのよい朝だねい」

「ほんとに天氣がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉のきれいなこと。さア出かけましょう」

民子の美しい手で持っている銀杏の葉も殊にきれいに見える。二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た氣になった。今日は大いそぎで棉を採り片付

け、さんさんおもしろいことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしと濡れて、いろいろの草が花を開いてる。タウコギは未枯れて、水蕎麥など一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊がと僕はわれ知らず足をとめたけれど、民さんは聞こえないのかさっさと先へゆく。僕はちよつと脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれつと叫んで駆け戻ってきた。

「民さんはそんなに戻ってきたいッたつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしていたの。私びっくりして……まアきれいな野菊、政夫さん、私に半分おくれッたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生まれ返りよ。野菊の花を見ると身ぶるいの出るほど好もしいの。どうしてこんなかと、自分でも思うくらい」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きます。

「政夫さん……私野菊のようだってどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊のような風だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだって……」
「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になってと言いながら、自らは後になった。今の偶然に起こった簡単な問答は、お互いの胸に強く有意味に感じた。民子もそう思ったことはそのそふりでわかる。ここまで話が迫ると、もうその先を言い出すことはできない。話はちよつと途切れてしまった。

何と言っても幼い兩人は、今罪の神に翻弄せられつつあるのであれど、野菊のような人だと云った詞について、その野菊を僕はだい好きだと言った時すら、僕はすでに胸に動悸を起こしたくらいで、すぐにそれ以上を言ひ出すほどに、まだまだずうずうしくはなっていない。民子も同じこと、物に突きあたったような心持ちで強く

お互いに感じた時に声はつまってしまったのだ。二人はしばらく無言で歩く。

真に民子は野菊のような児であった。民子は全くの田舎風ではあったが、決して粗野ではなかった。可憐で優しくてそうして品位もあった。厭味とか憎気とかいう所は爪の垢ほどもなかった。どう見ても野菊の風だった。しばらくは黙っていたけれど、いつまで話もしないでいるはなおおかしいように思つて、無理と話を考え出す。

「民さんはさっき何を考えてあんな脇見もしないで歩いていたの」

「わたし何も考えていやしません」

「民さんはそりゃ嘘だよ。何か考えごとでもしなくてあんな風をする訣はないさ。どんなことを考えていたのか知らないけれど、隠さないだつてよいじゃないか」

「政夫さん、済まない。私さっきほんとに考事していました。私つくづく考えて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしょう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言うんだらう。先に生まれたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのじゃないか。

十七だから何で情ないのですか。僕だって、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを言う人だ」僕も今民子が言つたことの心を解せぬほどの児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れのように聞きなしで、ふり返つて見ると、民子は真に考え込んでいるようであつたが、僕と顔合せてきまりわるげににわかに側を向いた。

こうなつてくると何をいうても、すぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内でもどちらか一人が、すこしほんのわずかにでも押しが強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互いに心持ちは奥底までわかつているのだから、吉野紙を突き破るほどにも力がありさえすれば、話の一步を進めてお互いに明け放してしまふことができるのである。しかしながら真底からおぼこな二人は、その吉野紙を破るほどの押しがないのである。またここで話の皮を切つてしまわねばならぬというような、はつきりした意識ももちろんないのだ。いわばまだとり止めのない卵的の窓であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまふのである。

お互いに自分で話し出しては自分がきまりわるくなる